|||||||
談話室
|||||||

農薬学会の大発展を祈って

私が京都大学の農芸化学科に入ったのは1949年春のこと
で、戦後まだ日も浅く、我が国の世の中は物資の欠乏した荒
れ放題の時代、実験中にガスが止まって、バーナーの炎が予
告もなくスーと消えて行くなど、淋しい悲劇は日常茶飯事で
あった。でも大学の雰囲気は意外と明るかった。一学科30
名の一クラス。小学校のように教授一人がクラス担任として
世話して下さいました。我々の場合、それが後に京大総長とな
ったあの有名な「奥田 東」である。「あずま」と読む。でも、
われわれは「とんさん」と呼んで親しんだ。これが極めてユ
ニークな大人物であった。このユニークな存在を描写してみ
よう。

まず入学早々クラスの親睦を図って、高槻の奥にある摂津
耶馬溪に出かけた。クラス仲間の一人に造り酒屋の御曹司が
いて、戦後間もないこととて、食べ物もろくに無い時代に、
清酒一升瓶二本をぶら下げて来て、われわれの大歓声に迎え
られて、勇躍目的地へ向かった。ところが、目的地に到達寸
前に、一升瓶を岩角にあて、一本が割れ、川の流れにあえな
く消えていって、全員茫然自失、意気消沈のうちに宴が始
まった。その時、やおら口を開いたトン先生、『酒、一斗で
あろうが、一合であらうが、同じく酔える酒飲みが、本当の
酒飲みであり、量の多寡が問題ではない』とおっしゃって、
にこやかに美味そうに一口召し上がった時の笑顔は今でも脳
裏に残っている。そのトンさんが、世の中あげて合成農薬大
反対の最中に誰はばかりことなく『いま時、合成農薬なしに
米を作ってみろ、誰もが疲れ切って音を上げるばかりか、減
収に泣くわ』とおっしゃった。農薬研究とまったく関係のな
かった人がこう言い張るのは相当胆力を必要とするのは間違
いない。

いまや「合成農薬は」と一口にいっても、殺虫剤あり、殺

2020年11月21日 自宅にて

菌剤あり、除草剤その他ありで、その多様性は医薬以上かも
しれない。その複雑怪奇な全貌を描き出すのは、もはや不可
能に近い。それを一括して合成農薬は毒だと誹謗するのが、
いわゆる「環境学者」である。たしかに毒と言えば毒だ。医
薬と同様、最初から毒だと知ってつきあえば、毒も薬も同じ
く化合物だとして、安全な付き合い方があるのである。これ
を世の中で理解されるよう努力を絶やさないようにするのが
「農薬学」の努力対象であり、われわれの使命の重要な一つ
である。

「農薬学会のみなさん」農薬学会の会誌が年々その内容が
高尚になっていくのを畏敬の念をもって見ている私を、さら
に驚かせるほど日本農薬学会がますます活躍の場を拡げ、発
展することを祈って筆を置きます。

深海 浩（京都大学名誉教授）